

追悼 小林幸夫教授



序

東海学園大学日本文化学会を長らく支えてこられたお一人である、人文学部教授の小林幸夫先生が逝去されました。一昨年から休職しておられたので、昨年四月初めに、事務局長、前学部長とともに、ご入院中の先生のお見舞いに伺いました。病室の窓からは、先生の御宅が間近に見えました。先生は、京都の花街の一つであった上七軒のこつとや、ご自身が洛中生まれであることなどについてお話しされながら、冗談を言ってお話を和ませてくださいました。奥様とお嬢様を交えてお話しさせていただきましたが、いかにも小林先生らしいお話しぶりと感じました。それから二週間後の四月十七日に、先生はお亡くなりになりました。和やかにお話しさせていただいたすぐあとだっただけに、唐突に逝ってしまった感じが拭えずにあります。ご冥福をお祈り申し上げます。

『東海学園 言語・文学・文化』は本号で第十七号となります。東海学園大学日本文化学会は会員数の少ない学会ですので、学会とその機関紙を維持するのは簡単ではありません。学会への小林先生の貢献は、この機関紙のバックナンバーを通覧してすぐに実感させられます。先生はこの機関紙のみならず、さまざまな学術雑誌に、夥しい数

序

のご論考を載せておられます。業績表を拝見すると頭の下がる思いがします。ここではご著書としてまとめられたもののみご紹介します。『咄・雑談の伝承世界―近世説話の成立―』（平成八年）、『しげる言の葉―遊びごろの近世説話―』（平成十一年）、『説話と俳諧連歌の室町―歌と雑談の伝承世界―』（平成二八年）、『西行と伊勢の白大夫』（平成二九年）、『蛙の神・立烏帽子・歌比丘尼―伝説・縁起・ハナシを尋ねる―』（平成二九年）。三冊目の『説話と俳諧連歌の室町』は、平成二九年度芭蕉祭文部科学大臣賞を受賞しました。受賞を知ることなく、お亡くなりになられたのが残念でなりません。

小林先生は、昭和四八年に立命館大学文学部をご卒業後、立命館大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了、同博士課程を単位修得退学され、花園高等学校にお勤めになられたのち、平成四年に東海学園女子短期大学国文学科助教授に就任、平成十年に教授昇進、十二年に新たに改組した東海学園大学人文学部教授に就任されました。その間、平成九年には文学博士（立命館大学）を取得されています。東海学園大学では、人文学部長、図書館長という役職を歴任され、大きな貢献をしていただきました。ご逝去後に、東海学園大学名誉教授の称号が授与されました。

こうして小林先生のご経歴を振り返ってみますと、高等学校の教員として勤めておられ、そのぶん大学教員・研究者としての期間が短いことが分かります。しかも昨今の大学教員の多忙さが身に沁みているだけに、いっそう先生の研究業績の質と量に、そして学問に対する情熱に、感嘆の念を抱かずにはいられません。我々も、先生に倣い、多忙ではあっても研究を続け、論文を書き続けなければならないと、それが我々に課された責務であると、改めて思うしだいです。それは我々の授業の質も向上してくれるものと信じております。

大場 厚志